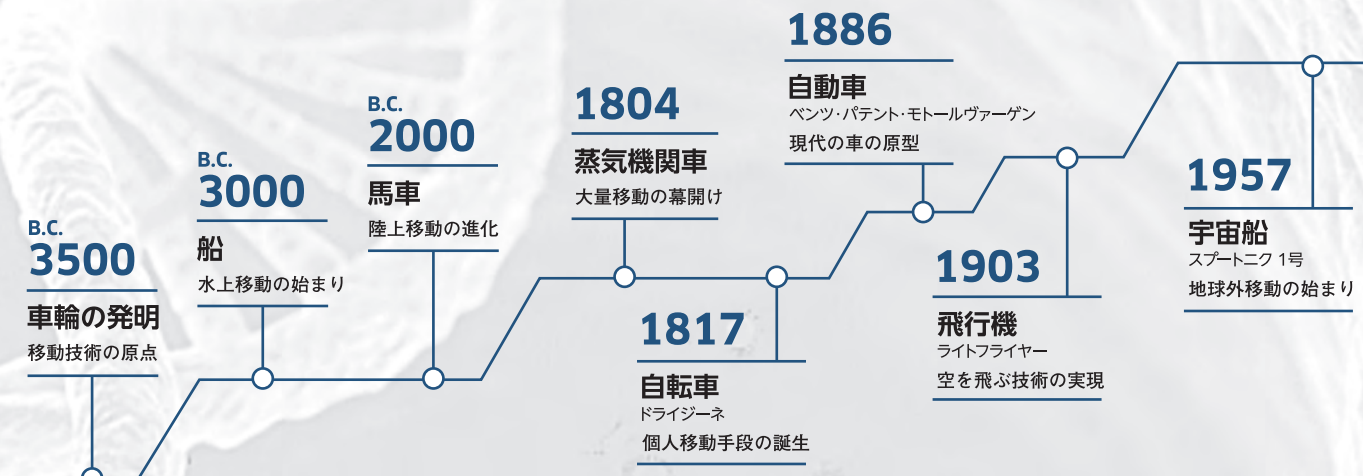


Theme of the Exhibition

展示テーマ「移動本能」

人に移動本能がある限り モビリティは進化し続ける



展示テーマの設定

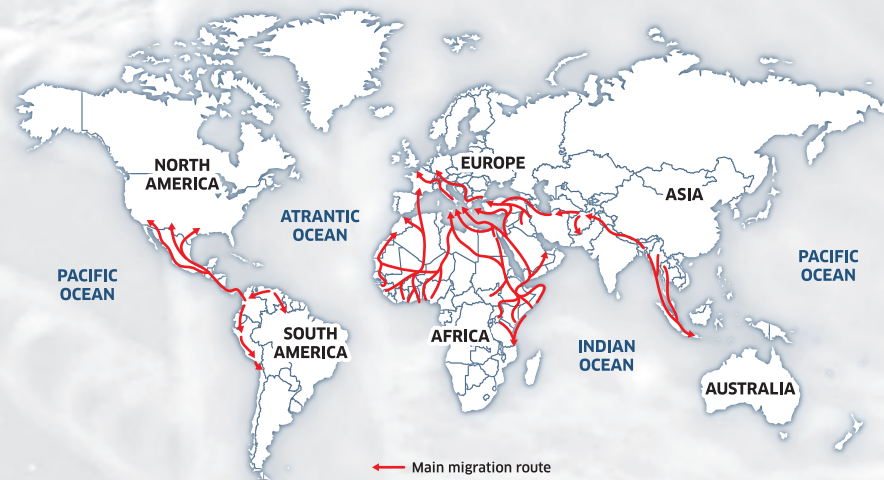
大阪・関西万博2025のテーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン」。これを踏まえ、「フューチャーライフ万博/未来の都市」の「交通モビリティ」エリアにおいて、120年以上にわたって社会へモビリティを提供し続けてきた川崎重工グループに相応しい展示テーマを概念から思索した。展示テーマには、大阪・関西万博を通じて未来のいのちの輝きを予感させるような普遍的かつ根源的なメッセージ性が必要だと考えた。モビリティはなぜ存在するのか、そして人はなぜ移動するのか、そういった問いを立てながら議論する中で、人類は誕生以来常に「移動する」存在であったこと、それは単なる生存のための行動ではなく深層心理に根ざした「本能」とも呼べる衝動であること、そんな研究成果も手掛かりに「移動本能」という核心ワードが生まれた。本稿では、学術研究成果も参照しながら人の移動本能の存在と、移動本能から生まれたモビリティの進化の歴史、そして移動とモビリティのこれからについて述べる。

「移動本能」の存在

人類は食糧や水を求めて、気候や環境の変化に対応して、あるいは未知への探求心から、絶えず移動を繰り返してきた。カリフォルニア大学の Chuansheng Chen氏は、人類の起源とされるアフリカからより長い距離を移動した民族ほど特定の遺伝子を保有しているとする研究を発表した。人類の祖先は約700万年前にアフリカで誕生したとされるが、彼らは定住せず、狩猟採集を中心とした生活を送っていた。移動は生存に直結しており、獲物を追い、季節に応じて住処を変えることが日常だった。やがて人類は約6万年前にアフリ

カを出て、ユーラシア大陸、オセアニア、アメリカへと広がっていった。長い年月をかけた進化の過程で、本能的に移動することが遺伝子レベルで組み込まれていったのだろう。人類史で見ると、現代のような移動をしない定住を始めたのはごく最近、数千年前のことで、我われのいのちは移動することが自然であり、その本能を満たすことがいのちを輝かせるための重要な寄与因子であると考えられる。

また近年の脳科学分野の研究として、マイアミ大学の Aaron Heller氏は、人は移動するほど幸せを感じるという研究成果を発表した。長期間にわたる移動の追跡調査と感情評価を組み合わせた研究により、日常の身体的な位置の移動が人間のポジティブな感情の増加と関連することが脳画像の分析により発見された。人は行ったことがない場所に行くなど探索の度合いが高い日には、脳の中の幸せを感じる領域がより強く働いていることが明らかになった。この欲求を満たすため、人類は長い年月をかけて世界を移動し、その手段として多様なモビリティを生み出してきたのである。



これらの研究以外にも、人と移動については世界中で多様な観点から探求されている。それらは遺伝子、生存、移動、脳、幸福といった、いのちに関わる普遍的かつ根源的な事柄の関係を示唆しており、いのちを輝かせる未来の交通輸送の姿を大阪・関西万博で展示するテーマとして相応しいと考え、「移動本能®」と称することにした。人類の移動本能を満たすモビリティを世の中へ提供し続けること、これは社会における当社の重要な存在意義のひとつだと考えている。

モビリティの進化

移動本能を満たすため、人類は創意工夫と技術開発を重ねて様々なモビリティを生み出してきた。紀元前3500年頃にはまず車輪が発明され、移動技術の原点が生まれた。そして紀元前3000年頃には、遠くに見える島には何があるのか渡って確かめたい、といった本能を満たすために船が発明され、人類の水上移動が始まった。そして紀元前2000年頃には人は馬車を生み出し、陸上移動が大きく進化した。古代文明では、陸路と水路を使った移動網が発達し、馬や船が主要な移動手段となった。そして18世紀の産業革命は、モビリティによる移動の概念を根本から変えた。蒸気機関の発明により鉄道と蒸気船が登場し、長距離移動が格段に容易になった。この劇的な社会変化の中で、当社は1896年に東京・築地に川崎築地造船所を開設し事業の第一歩を踏み出した。さらに19世紀末には自動車が生産し、個人の移動の自由度が飛躍的に向上。20世紀に入ると航空機の登場により、移動本能を満たすモビリティはついに「空」へと拡張された。当社も造船から機関車、航空機、ヘリコプターやバイクへと、都市化の進展、観光レジャーの発展、国際交流の加速など、移動が社会構造そのものを変えていくのに応じて、陸海空のモビリティを次々と世の中へ提供していった。

移動とモビリティのこれから

21世紀に入りモビリティはさらに多様化し、技術革新は移動の形を根本から変えつつある。またデジタル技術の進展により、「情報の移動」や「仮想空間での移動」も重要な意味を持つようになった。さらに気候変動や都市の過密化といった課題に対応するため、持続可能なモビリティ（サステナブル・モビリティ）への関心が高まっている。公共交通の再評価、自転車や徒歩の促進、MaaS（Mobility as a Service）などの概念が登場し、移動本能を満たしつつも環境負荷を抑える取り組みが進んでいる。宇宙旅行の実現、火星移住計画、メタバースでの仮想移動など、移動の舞台は地球を超えて広がりつつある。これは単なる技術的挑戦ではなく、人類の根源的な欲求―「新しい場所へ行きたい」「未知を知りたい」という移動本能の延長線上にある。移動は人類の進化の原動力であり、文化の交差点であり、未来への扉でもある。大阪・関西万博における当社の展示物は、見た人が移動本能を刺激され未来社会の移動にワクワクして貰いたい、そんな願いを込めて未来のモビリティの姿を提案したものである。

PROFILE



技術開発本部 イノベーションセンター
イノベーション推進部 一課
(兼)コーポレートコミュニケーション総括部
大阪・関西万博推進課 基幹職

永原 斉



総務本部 総務部 渉外・地域共創課
(兼)コーポレートコミュニケーション総括部
大阪・関西万博推進課 主事

林 智之

*モビリティの誕生時期には諸説あります